

「幼児教育の源流」～子どもたちのパワーに未来を託す～

学校法人島田学園 理事長 島田 教 明



私の祖父がこの地に幼稚園を開園してから今年で67年が経ちます。その間、多くの卒園児が社会に出て活躍してくれています。実は私も本園の卒園児です。私は、これまで幼児教育の発展・充実とともに子育て世代の方の支援に力を入れてきました。それは、私が児童心理治療施設での勤務体験、保育園や幼稚園の園長や理事長の経験を通して、幼児期の教育が人格形成に重要なものであると感じてきたということもありますが、私のDNAの中に祖先からの子育て支援の想いが引き継がれているのではないかと感じています。

保護者の皆様をはじめいろいろな方に、「お寺が経営している保育園や幼稚園が多いのは何故ですか？」という質問を受けることがあります。「寺子屋」という言葉を耳にされた方も多いと思いますが、鎌倉時代ごろから使われている言葉で、お寺で住職が子どもたちを相手に読み書き計算などを教えたことによると言われています。その後、農繁期などの家庭が忙しい時期にお子様をお預かりする季節保育所のようなものとなり、明治時代に通年の保育園となったと言われています。そこでは、読み書き計算だけではなく、保護者に代わってしつけなども行いました。集団生活の中で礼儀作法を身に付け、清掃や他者への思いやりなどマナーも育ちました。

寺子屋をはじめとした私塾のおかげで我が国の教育水準は昔から高く、江戸時代に人口100万人都市であった江戸（現東京都）では、文字の読み書きができる識字率は70～80%であったと言われています。全国的にはかなりばらつきがありますが、平均すると30%程度とされています。当時のロンドンやパリといった大都市の識字率が1～3%であったことを考えると驚異的です。江戸時代には、寺子屋では読み書きに加え、商人の子どもには「商人往来」、農民には「百姓往来」など実学も教えていました。

江戸時代末期には欧米列強が世界各地を植民地にしていきました。東南アジア地域でも多くの国が欧米列強の植民地となり、我が国も同じような危機に直面していました。しかし、明治維新後のわずかの間に欧米列強と伍していける成長を成し遂げ、先進国の仲間入りを果たしました。また、第2次世界大戦後、敗戦国の我が国は世界最貧国でしたが、20年後には東京オリンピックを開催できるほどの奇跡的な復興を果たしました。資源の少ない我が国が奇跡的とも言われる成長を成し遂げ、国の滅亡という危機を乗り越えられたのは、国民の教育水準が非常に高かったことによります。国の繁栄と国民の幸せの実現という共通の目標に、日本国民が困難に整然と立ち向かい、努力した民度の高さに由来するものです。

平成23年に起きました東日本の大震災後に来日されたブータン国王が、「未曾有の災難に直面しても、日本の皆さんは尊厳、自信、規律、心の強さを持って対処されました。長い歴史と伝統の中で育まれた卓越した資質によるものです。そうした力を備えた日本には、非常に素晴らしい未来が待っていることでしょう。」と、国会での演説の中で述べられています。心ある諸外国は、日本国民の素晴らしさとそれを育ててきた教育に畏敬の念を感じているものです。

現在、わが国は、未曾有の少子高齢化社会を迎えています。私としては、子育て世代の方々が生み育てることの喜びや楽しさを実感できる社会をつくることが重要だと感じています。

国においても、「こども・子育てにやさしい社会づくり」を標榜した子育て支援の施策を進めています。幼児教育の充実では、保育士や幼稚園教諭の確保に向けて、給与の改善や継続的に働き続けられる職場環境の改善を進め、幼稚園等の教育内容の充実を目指しています。また、幼児期の教育が小学校以後の教育に引き継がれていくことが重要であるとし、全国各地でモデル地域

を設け、「幼保小の架け橋プログラム」の実践・成果の検証を行っています。さらには、今後、幼児教育の効果を長期間にわたって追跡する調査研究も進めることとしています。今年度、小学校に入学した子どもたちを、5年間、追跡調査し、幼児教育が子どもの発達、小学校以降の学習や生活にどう影響を与えるかについて検証を行うとのことです。

話は変わりますが、昨年10月には、年長児が5年ぶりに農業大学校を訪問し、牛さんたちにふれることができました。長いコロナ禍や農業大学校の改修などで久々の訪問を子どもたちはとても楽しみにしていました。しかし、天気予報では訪問日を含めて4日間連続の雨予報でした。当日も雨の中をバスに乗り込みましたが、雨がやまなければそのまま帰ることにしていました。しかし、子どもたちが農業大学校にいる間だけは、雨は止んでくれました。子どもたちの活動する姿は、不思議なほどパワーを放ちます。



〈農業大学校 R6. 10. 3 :

しまたのりあきブログから〉

本園ではかなり以前から北欧の幼児教育の理念であるプロジェクトメソッドを導入しています。子どもたちが能動的に問題解決していく教育を行ってきました。数年前から、小・中学校でもアクティブ・ラーニングの考え方が導入されましたが同様の理念です。小・中学校等の学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」と表現されるようになるとともに、その具体的な実践例として、異年齢の子どもたちが互いに学び合う寺子屋がよく引き合いに出されます。

先ほど、幼稚園と小学校の連続性、幼児教育の効果検証を国が今後行うというお話をしました。かつて、教員免許の更新制度がありましたが、現場の教員の負担になるという意見の中、いつの間にかなくなりました。それでも教員不足は加速化され、喫緊の課題となっている中、多大な税金をつぎ込む検証が、現場の教職員を元気づけるものになることを祈るばかりです。

私は、この10年間、母校の小学校6年生を対象に、「これからの社会を生きていく皆さんに伝えたい私の思い」のタイトルの講演を続けています。私が園長、理事長をしてきた幼稚園や保育園の卒園生も多く、いつも熱心に聴いてくれるので、つつい力が入る時間でもあります。昨年12月の講演では、児童心理治療施設に勤務していたときの経験、変わりゆく防府のこと(バイオマス発電、農業拠点)、山口県立総合医療センターのこと(医療福祉の拠点)、防府市の図書館のこと(上山満之進翁と陳澄波画伯)、中関の防災のこと(周防灘台風、堤防)、防府市役所新庁舎のこと(展望回廊、行政の拠点)など話題一杯に話しました。あっという間の45分でした。



〈中関小学校での講演 R6. 12. 14 :

しまたのりあきブログから〉

今、防府市のまちづくりは「拠点」です。県や市の部局が同じ庁舎に入り、農業、医療、工業など質の異なるものが集まることで互いが助け合い、活性化し、まちの雰囲気が明るくなり、さらにまちづくりが加速化します。そういったことが防府のまちづくりのポイントとなります。「皆さんも、いじめやケンカをすることなく、仲良く小学校生活を過ごせば、毎日がもっと楽しくなるはずです」という言葉で締めくくりました。

その後、子どもたちから講演の感想文が届きました。子どもたちは、本当に真剣に聞いてくれました。ありがたい機会を与えてくれた後輩たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

この子たちが我が国の未来を切り拓き、創造してくれると思います。私たちが実践してきた幼児教育が着実に根付いていると確信しています。